

色づく谷川岳へ

岩井 淑

「くにざかいの長いトンネルを抜けると、そこは雪国であった……」

川端康成の『雪国』冒頭の一節である。この長いトンネル＝清水トンネルは群馬、新潟両県境にまたがる谷川連峰の懐ろをつらぬいている。

思えば今日、発作的に谷川の紅葉を見に行こうと思い、二日酔いの身体ながら早朝4時30分に幕張の家を後にしたのであった。

群馬県側の谷川岳への登山口駅は土合である。486段の長い階段を昇り終わり改札口を出ると実に殺風景な駅前である。店屋が一軒もないのだ。この駅はまさに登山口の駅としてのみ存在しているかのようである。

駅前の通りを右折し、ゆるやかにのぼっていき雪避けのトンネルを過ぎた右手に慰霊碑が建っている。谷川岳で遭難死した人達の慰霊碑である。昭和6年を最初とし、今年の平成5年まで700名を越える人達の名前が刻まれている。その名前の前に家族が、あるいは友人が手向けたのであろう幾種類もの花がうずたかくつまれてある。

谷川連峰の山々は標高はいずれも2000メートル前後なのだが、穂高岳、剣岳とともに日本三大岩壁の一つに数えられている一の倉沢を擁している。従って遭難者の大部分が冬山と岩壁登攀の犠牲者なのである。しかし魔の山といわれる谷川岳も天神尾根あるいは西黒尾根から登頂するかぎりには危険はないのである。事実、今回の登山コースに選んだ天神尾根はファミリーコースとして老若男女で大賑わいであった。

10月10日、11日の連休を外しての山行なのだが、天神峠へのリフトには順番待ちの長い列が出来ている。バスや車が入るので老人でもハイヒールにスカート姿の女性でも峠の上に立つことが出来る。谷川岳、万太郎山、仙ノ倉岳へと続く稜線が、反対側には白毛門や朝日岳への山波が、キラキラと輝く紅葉が秋晴れの下に360度のパノラマとなって目を楽しませてくれるのだ。70代の人「この歳で山に登れるとは夢にも思わなかった。すばらしい景色だ。本当に来て良かった……」という感動の声が聞こえてくる。

赤く色づくウルシにナナカマド、橙色のツタや黄色のシラカバやブナなどが紅葉、黄葉に染まり、今まさに全山紅葉の時期を迎えており、山々が四季を通じて最も華やかな姿を私たちの前に現す時だ。

天神平や天神峠の賑わいを後に山頂へむけて尾根に歩を進める。一度コルまで降りてそこから登り返すのだが、全山色づく中を歩くのは春の白い緑の中を歩くのとは違った趣きがある。

30分程で二股からの道を左から合わせる地点に鉄筋で建てられた熊穴沢の頭の避難所がある。頑丈な建物である。壁面にガラスが多いのが建物の中を明るくしており、感じがいい。屋根は朱色に塗られている。厳冬期の吹雪の中で何人かの人達が安らぎの小屋として利用したことだろうか。

尾根を登るにつれて熊笹が多くなる。下から見上げていた時に、ハイマツではないし、

あの緑は何だろうか。と不思議だったが正体は熊笹だったのである。斜面が一面、笹原となって谷に落ち込んでいるのだ。以前に読んだ新田次郎の作品の中で、登山者が誤って足を滑らし笹原を落ちていく情景に出くわしたことがあるが、まるでジェットコースターのように滑落していくというも地形を見ると納得しえるのだった。この笹原は登山道に沿って広がっている。いや、登山道が笹原を突っ切っているのだ。

左手にすっきりと立ち上がっていた万太郎山の山頂にガスがかかりだした。あと30分もしないうちに谷川岳山頂もガスの中に入るに違いない。

程なく肩の小屋に到着するが、現在は小屋の老朽化のために立替え作業中であり、カンカンという金槌の音がこだましている。もうすぐに初雪が降るというのに、それまでに組み立てられるのだろうか心配になる。

西黒尾根と天神尾根の交差点には15、6人が思い思いに弁当などを広げてくつろぎ、その先のトマの耳にもやはり20人前後の人達が休んでいる。

谷川岳は双耳峰である。犬や猫の耳のような形をした2つの山頂をもつものを双耳峰と呼ぶが、谷川岳もトマの耳とオキの耳を持つ双耳峰である。従ってトマの耳から15分もあれば、もういっぽうの山頂であるオキの耳まで行くことができる。2つの山頂を結ぶ稜線の右側はオジカ沢へとスッパリ落ちる絶壁である。

万太郎山の山頂がガスに包まれ始めたときに谷川岳の山頂がスッポリとガスの中に入るのは時間の問題だと思ったが、案の定、左側の谷底から一気にガスが吹き上げてくる。視界はみるまに遮られ、乳白色の世界になってしまった。天候が好転する気配はまったくない。当然のことながら気温も一気に下がってきている。こうなれば一刻も早く下へ降りなければならぬ。山頂での長居は無用である。

先程登ってきた天神尾根を降り始める。途中から見る天神平には陽が射しているのだが、振り返って見上げる山頂は暗〜いガスの中である。

今年は冷夏で長雨の影響を受け、谷川岳の紅葉もイマイチだと言われているが、太陽の光を受けてキラキラ輝いている風景を見ていると、本当かなと深く思ってしまうのだ。それほど美しい紅葉に回りいっぱい包まれているのだ。

「まっかっか、谷川岳」というキャッチ・コピーの言葉を実感する山行だった。

1993. 10. 12. 記